

『ナイフ』を読んで

情報通信工学科 2年 秋山 祥慧

私はナイフを持っている。

これで息子を守ってやる……。

この本は現代のいじめがリアルに描かれた、被害者の少年の父親が主人公の話である。普通なら、いじめられている本人やいじめている本人が主人公になり、その主人公の心情がつづられているが、この本は父親が主人公で、今までとは違った視点で心情を知ることができる。

息子の真司は学校でいじめにあっていた。何も言ってこないが、明らかに様子のおかしい真司に母親は、もしかしたらいじめられているのでは、と不安を募らせる。父親は、まさか自分の息子が、と不安に思いながらも、いじめを信じなかった。

だがある日、父親は見てしまったのである。表紙が引きちぎられ、落書きだらけの息子の教科書を。

もし私が父親だったら、すぐにでも学校に言いつけると思った。しかし、この父親は、「親が首を突っ込むっていうのは、屈辱なんだ。恥ずかしくてたまらないから……泣き言なんか言いたくないし、自分の負けているところを家族には見られたくないんだ」と言っていた。

たしかにそうだ。もし私が真司の立場なら、いじめの事実を絶対言わなかったと思う。自分の親を悲しませるのは嫌だし、プライドが許さない。最初は息子の気持ちをととてもよく理解しているすごい父親だなと思ったけど、この本をどんどん読んでいくうちに考え方が変わっていった。

私はナイフを持っている。

背広の内ポケットに、それはいつも入っている。

それが父親の口癖だった。何か恐ろしい場面に出くわしたときは、そのナイフを勇気に代えていた。父親は真司が産まれたとき「生きることに絶望するような悲しみや苦しみに、決して出会わないように。」と、新生児室の窓にへばりつき、祈った。ただそれだけを望んだのに、今息子は生きることに絶望しようとしている。そんな息子を守れない自分が情けなくて……。

父親の息子への思いが切なかった。父親は真司の気持ちを痛いくらいわかっている。いじめについて触れられたくない真司。いじめから守ってやりたいけど何もできない父親。このとき私の中で、父親の人物像が変わった。息子の気持ちのわかるすごい父親から、ずるい父親に。結局は、自分が弱くて息子を守る勇気がなかったから、あんなことを言ったのだと思った。ナイフを持つことでしか強くなれない父親なのだと思った。

最後、父親が息子にナイフをあげようとするシーンがあったが、息子はこのナイフを受け取らなかった。真司はナイフなんかなくても生きていく強い心を持った少年だった。そ

のまっすぐで強い心は、父親と母親の愛情をたっぷり受けた証だと思った。

今も昔もいじめはある。でも、最近のいじめは陰湿で自殺にまで追い込むほどだ。また、私と同世代の人が自分の親を殺すという殺人事件までおきている。自分を産んで育ててくれている親を、そんな簡単に殺すことができるのか……。とても考えられない事件だ。

私は「愛情不足」がその原因の一つにあると思う。私はこの夏休み、学童保育といって小学校の低学年の子を預かっているところでアルバイトをしていた。そこに来る子は、片親だけだったり、両親が共働きで家に居なかったりする子がほとんどだ。みんなで遊んでも、自分の思い通りにならないとすぐ怒ったり、急に暴れだしたり、平気で「死ぬ。」や「殺すぞ。」などと言ってくる子もいる。最初は驚いて戸惑ってしまったが、学童保育の先生の話の聞いていると、「愛情不足」が原因だと知った。小さい頃から親と接する時間が少ないと、どうしても愛情不足になってしまい、それがその子の性格や生活態度に現れてくるようだ。最近は両親が共働きの家庭が多くなっている。それが悪いことだとは思わないし、私も将来は子育てをしながら自分のやりたい仕事もしたいと思う。大切なのは時間ではなく、愛情のかけ方だ。やって駄目なことをしたときはちゃんと叱ったり、いいことをしたときはいっぱい褒めたり、抱きしめて喜んだり、どれも愛情がないとできないことだ。

私自身を振り返ってみると、改めて親の愛情を感じるものがたくさんあることに気付いた。また、周りの友達にも恵まれていると思った。

私はまだ親に育ててもらっている子供だが、三年後には二十歳になり、社会人になる。あと三年で立派な大人になる自信はないが、これから自分を見直し、少しずつでも努力していきたいと思う。この本の主人公の父親みたいに、弱くても愛情があって、本当に大切なものを守れる大人になりたい。

『ナイフ』 重松 清著 新潮社